

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物に関する評価の理由(案)

哺乳類・鳥類

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
<p>タイワンザル ----- カニクザル ----- アカゲザル</p>	<p>遺伝的攪乱 生態系への被害</p>	<p>・ニホンザルが生息可能な環境では本種も生息が可能であり、すでに和歌山県及び青森県でニホンザルとの交雑が確認されており、遺伝的かく乱により在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・一部地域では被害対策として捕獲等が進められている。</p>
<p>アライグマ ----- カニクアライグマ</p>	<p>捕食、競合駆逐 農林水産業への被害</p>	<p>・国内に天敵が存在しない増殖力の強い雑食性動物で、水生植物から樹上生物まで幅広い食性を有し、捕食を行うことで在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・各地で農作物の食害が報告されている。 ・ペットとしての飼育数が多く、飼育個体の逃亡、遺棄が続き、個体数も増加している。</p>
<p>ジャワマンゴース</p>	<p>捕食 農林水産業への被害</p>	<p>・奄美大島、沖縄島で希少な在来生物を捕食することにより、生態系への被害が深刻化しており、防除などの対策がすでに実施されている。 ・国外でも、食肉獣のいない島嶼に持ち込まれた際、在来の生物群集に対するインパクトが大きいことが指摘されており、本種が在来生物の絶滅要因になったとされる事例が報告されている。 ・鶏卵、鶏雛に対する養鶏被害や、農作物への被害が報告されている。</p>
<p>クハラリス(タイワンリス)</p>	<p>競合駆逐</p>	<p>・飼育個体数が比較的に多い上、逸脱、野生化の事例も多く、さらに分布を拡大すればニホンリスとの競合や樹木の皮剥ぎ等により、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。</p>
<p>トウハイロリス</p>	<p>競合駆逐</p>	<p>・イギリス、イタリアなどで在来のリス類(特にキタリス)を駆逐した事例やブナ類、カン類などの樹皮を食害することによりヨーロッパの森林生態系に被害を及ぼした事例が知られており、北アメリカ原産であるため日本に定着する可能性も高く、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。</p>
<p>ヌートリア</p>	<p>周辺環境の攪乱 農林水産業への被害</p>	<p>・水生植物を大量に捕食し、水鳥などと餌資源をめぐる競合関係が生じる可能性があり、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・水辺、または水辺周辺の稲作などの農作物に対し食害を与えており、各県で防除等の被害対策が行われている。</p>
<p>フクロキツネ</p>	<p>競合駆逐、捕食</p>	<p>・国外で、無脊椎動物や鳥類の捕食、植物を食草とすることによる森林環境の変化等の被害の事例があり、日本の気候にも適応するものと考えられることから、我が国に定着すれば在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。</p>
<p>キョン</p>	<p>周辺環境の攪乱 農林水産業への被害</p>	<p>・国外では、下層植生などへの食圧により森林の更新を妨害するとともに昆虫類の食草の減少などが指摘されており、国内でもニホンジカが採食しない植物をキョンが採食することによる自然植生への影響が指摘されており、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・千葉県では有害駆除の対象とされている。</p>
<p>ガビチョウ ----- カオグロガビチョウ ----- カオシロガビチョウ ----- ソウシチョウ</p>	<p>競合駆逐、捕食</p>	<p>・定着が確認されている九州・四国・本州のブナ林等の原生的森林において、ソウシチョウ、ガビチョウが最優占種となり、群集構造が著しく変化している可能性があることから、生態系等に被害を及ぼすおそれが指摘されている。また、長期的には競争種や捕食される小動物等への直接の負の影響も推定される。 ・ハワイ諸島では、ガビチョウとソウシチョウが侵入した地域では在来のハワイ固有鳥類が衰退していったというセンサスデータがある。</p>

爬虫類・両生類

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
ガミツキガメ	捕食、競合駆逐 人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・在来の淡水産カメ類より大型であり、肉食傾向が強いため、在来生物の捕食により生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・咬みつきによる人の身体への被害が大きいと考えられる。
グリーンアノール	捕食、競合駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・小笠原諸島ではチョウやトンボを始めとする昆虫等を活発に捕食しており、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・原産地では温帯まで分布していることから、本州中部以南で広く定着するおそれがある。
ブラウンアノール	捕食、競合駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・フロリダ半島では在来のトカゲ類と競合し駆逐しているとの報告がある。 ・アメリカでは、徐々に北に分布を拡大しており、気候的には日本国内でも定着が可能で、定着すれば在来の生物相に影響を与えるおそれがある。
ミナオオガシラ	捕食	<ul style="list-style-type: none"> ・グアム島では本種が定着したことにより、多くの動物(特に鳥類)を捕食して絶滅させたことが知られており、我が国に定着すれば、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。
タイワンスジオ	捕食	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄島に定着し、分布を拡大しており、希少な種が多く生息するやんばる地域に分布が及ぶことが懸念されている。 ・哺乳類・鳥類を捕食する大型の捕食者であることから、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。
タイワンハブ	捕食 人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄島に定着し、分布を拡大しており、希少な種が多く生息するやんばる地域に分布が及ぶことが懸念されている。 ・哺乳類・鳥類・両生類等を広く捕食するため、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・外国産の毒蛇として唯一日本に定着しており、人への咬傷被害が懸念される。
オオヒキガエル	捕食、競合駆逐、 毒による捕食者への影響	<ul style="list-style-type: none"> ・カエル類としては大型に成長し、昆虫を始めとする地表性の小動物を貪欲に捕食すること、また、体表から出る毒によって希少種を含む捕食者に影響を与えることから、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。

魚類

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
コクチバス	捕食、競合駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・ 海外の湖沼では本種の導入後、在来種の減少などを含む魚類群集構造の変化が報告されている。 ・ 北アメリカ原産であるため冬の低水温にも耐えることが可能であり、かつ繁殖力が旺盛である。流水域でも生息が可能なため、日本各地の湖沼のみならず河川にも広く侵入・定着しており、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・ 上述の定着した湖沼では、釣り魚になっているが、これ以上の分布拡大を防ぐことについては社会的合意がなされており、各地で対策がとられている。
ブルーギル	捕食、競合駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・ 北アメリカ原産であるため冬の低水温にも耐えることが可能で、かつ繁殖力が旺盛であるため、日本各地の湖沼やため池などに広く侵入・定着し、優占魚種の一つとなっている。 ・ ため池でブルーギルが急増した時期に在来魚が激減した報告があるなど、捕食や餌をめぐる競争によって在来魚を駆逐する可能性が指摘されており、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・ 多様な水域環境で生息でき、かつ水生植物から昆虫、甲殻類、魚類まで幅広い食性を持つ雑食性魚類であり、水生生物全般にとって脅威となりうることから、各地で問題とされ対策がとられている。
チャネルキャットフィッシュ	捕食、競合駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大型になる上位捕食者であり、メキシコでは本種の導入・定着後に在来魚類の減少を含む在来生物相の変化が報告されている。 ・ 北アメリカ原産であるため冬の低水温にも耐えることが可能で、近年、霞ヶ浦では急速に生息数が増加しており、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。

昆虫類

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
ヒアリ	捕食、競合、 人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・人や家畜への刺咬被害が数多く報告され、人を刺した場合、子供やアレルギー体質の人が重篤になることがあることから、人の生命・身体への被害が明らかである。 ・爬虫類、小型節足動物などを捕食するとともに、高い競争力をもって在来のアリの駆逐することが国外の知見により示されており、日本に定着する可能性があることから、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。
アカヒアリ	捕食、競合、 人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・人や家畜への刺咬被害が数多く報告され、人を刺した場合、子供やアレルギー体質の人が重篤になることがあることから、人の生命・身体への被害が明らかである。 ・小型節足動物などを捕食するとともに、高い競争力をもって在来のアリの駆逐するなど、在来の生態系への被害が明らかである。
アルゼンチンアリ	捕食、競合・駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・多女王性の大きなコロニーを作り、小型節足動物などを捕食するとともに、高い競争力をもって在来のアリの駆逐するなど生態系への被害が明らかである。 ・すでに広島県を中心として定着・分布拡大の傾向にあり、今後西南日本に拡大することが懸念される。

無脊椎動物

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
ゴケグモ属のうち4種(セアカゴケグモ、 ジュウサンホシゴケグモ、ハイイロゴケグモ、ク ロゴケグモ)	人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・この属は、α-ラトロトキシンという神経毒を有し、刺咬により運動神経、自律神経が障害され痛み、発赤、嘔吐などの症状を伴う。血清投与が遅れれば死亡する可能性もあり、人の生命・身体に被害を及ぼすおそれがある。
イトグモ属(<i>Loxosceles</i>)のうち3種 (<i>L. reclusa</i> , <i>L. laeta</i> , <i>L. gaucho</i>)	人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・海外において、これらの種が由来となるイトグモ刺咬症による死亡例が報告されており、人の生命・身体に被害を及ぼすおそれがある。
ジョウゴグモ科のうち <i>Atrax</i> 属全種及 び <i>Hadronyche</i> 属の全種	人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・海外において、<i>Atrax</i> 属および <i>Hadronyche</i> 属が由来となるジョウゴグモ刺咬症による死亡例が報告されており、これらの属については、人の生命・身体に被害を及ぼすおそれがある。
キョウトウサソリ科全種	人の生命・身体	<ul style="list-style-type: none"> ・海外において、本科に属するサソリによる刺傷が原因となった死亡例などが報告されており、人の生命・身体に被害を及ぼすおそれがある。

植物

特定外来生物の指定対象とすることが適切である外来生物	被害の概要	評価の理由
ナガエツルノゲイトウ	競争・駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・周年開花して種子繁殖を行うとともに、茎の切片による栄養繁殖が極めて旺盛で、生長が速い。 ・マット状に群生するので、海外では在来の植物が駆逐されているとの報告があり、近年、国内で急速に分布を拡大中または局所的に大繁茂しているため、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。
ブラジルチドメグサ	競争・駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・種子繁殖を行うとともに、根茎はばらばらになり易く、切片による栄養繁殖が極めて旺盛である。 ・岸近くだけでなく水面に浮遊して密なマット状に群生するので、光などが奪われて在来の水草類が駆逐されるとともに、水中の溶存酸素の減少により水生生物の生息環境が奪われるおそれが指摘されている。また、貧栄養の水系でも生育できるので、希少種の生育を脅かす可能性が高く、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。 ・ヨーロッパでは、近年になって急速に分布を拡大している。
ミズヒマワリ	競争・駆逐	<ul style="list-style-type: none"> ・栄養繁殖が極めて旺盛で、ちぎれた茎は節から根を出し、生長が早く、短期間で大きなコロニーを形成する。 ・非常に密なコロニーを形成するので、他の植物を駆逐する危険性が高いことが指摘されており、近年、国内で急速に分布を拡大中または局所的に大繁茂しているため、在来の生態系に被害を及ぼすおそれがある。

|